

建設工業新聞

SANKEN ENVIRONMENTAL ENGINEERING

空気と水の環境創造企業

三建設備工業

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-8 TEL03(3667)3431
http://skk.jp

事業者・経営者と話し合いの場もちたい

クローズアップ

近代に建てられた建築物の価値を考え、その将来の道を探ろうと、二つのシンポジウムがこのほど開かれた。議論の対象となった建物は、解体が予定されている東京女子大学旧体育館(設計者=アントニン・レーモンド、1924年竣工)と、保存を求める鳩山邦夫総務相の発言でクローズアップされた東京・大阪中央郵便局庁舎(同一吉田鉄郎、東京31年竣工、大阪39年竣工)。それぞれのシンポジウムをレポートする。(編集部・山口裕照)

日本建築学会(斎藤公明会長)主催の「東京・大阪中央郵便局の文化的価値」と題する緊急シンポジウム(3月22日、東京・芝の建築会館ホール)では、学術的観点から中央郵便局を検証し、現在の法制度や経済システムの中で近代建築を保存する手法があるのかどうかを議論した。写真。

建築学会建築計画委員会委員長の布野修司滋賀県立大教授は「建築計画学は新たな方向を求められつつある。一つは公共施設の再編の方向性を明らかにすること。もう一つは既存の公共施設をどう活用していくか」と保存再生、

転成させていくかが大きなテーマだ」と説明。その上で「鳩山(邦夫)大臣のインパクトある言語、問題提起を得て、一般に開かれた議論の場を設定した。議論を重ねるだけでなく、積極的に提案も重ねていきたい」と語った。

郵政省で建築部門の管理を担当していた南一誠芝浦工大教授は、二つの局舎の文化的価値をめぐり、これまで経緯について解説し、その建築的価値として▽戦前の日本における近代建築の中でも最も優れた建築▽わが国近代を代表する建築家・吉田鉄郎の作品▽駅前の景観を構成する重要な要素の3点を列挙。「一見、単純に見えるが、窓の大きさやタイル割りなど、細部まで緻密に考え抜かれた設計。それが吉田鉄郎の建築的真髄であり、それが通信建築、郵政建

築に受け継がれていった」と力を込めた。

前野まさる東京芸大名誉教授は、江戸から明治・大正・昭和と続く丸の内歴史をひもとき、皇居と東京駅を結ぶ日本の玄関であることを強調する一方で、「今回のかさぶた的保存は何を語るのか。公的民営化の郵政の目的は何か。不動産事業なのか」と疑問を投げかけた。

「東京中央郵便局を重要文化財にする会」の多見貞子、大橋智子、山本玲子の3氏からは、2000年前半から保存要望の動きがあったことや、設計者が決まっている中で歴史検討委員会が開かれていたことなど、局舎を取り巻く状況を時系列に解説した。

丸の内の超高層化について五十嵐風敬喜法政大教授は「国、都、千

代田区および日本資本主義のチャ

要文化財を壊していいのか▽皇居

建築家の宇野求東京理科大教授

審議会なども

東京女子大学旧体育館 —設計・レーモンド—



3月14日の公開シンポジウム「東京女子大学旧体育館の解体を再考する」は、東京都杉並区の同体育館で解体問題に関心を寄せる同大教職員の有志により開かれた。写真。

シンポジウム実行委員会委員長の森一郎同大哲学科教授は「学外の専門家からも具体的な説明をうかがい、立ち止まって考える機会にしたい。(解体を)絶対反対という結論ありきの議論にならぬよ

う、キャンパス整備を進める側の人たちにも出席をお願いしたが、残念ながら不参加となった」と述べた。

同大卒業生で作家の永井路子氏は、旧体育館での思い出を披露し、「一つ一つはつまらない東

京女子大物語だが、歴史のかけらがある。女子高等教育機関の中で、大正時代に建造された唯一のものとして建物自体の持つ重要性を考

えてほしい」と強調。「残して良かった」「残せば良かった」という経験はたびたびある。だが「残さないで良かった」という経験は一度もない」とし、解体を進めようとする大学側の話し合いを求めた。

近代建築の保存を考える二つのシンポ

日本人建築家に大きな影響を与えたレーモンドが手掛けた旧体育館について鈴木博之東大大学院教授(当時)は「モダニズム建築は素っ気ないと思われてしまっ

た。だが、この建物も柱と梁の骨格そのものが建築をつくっている。モダニズム建築の先駆けであり、細部

旧体育館を中心とする校舎の研

東京・大阪中央郵便局庁舎 —設計・吉田鉄郎—



さらに議会や審議会などもすべて突破されている。周辺がすべて超高層の中で一つだけ残すことにとどのよう

な意味があるのか▽指摘。今後については▽郵政民営化とは不動産ビジネスなのか▽国は重

要文化財を壊していいのか▽皇居

建築家の宇野求東京理科大教授

審議会なども